

斎藤牧場の事務所建築

山 口 廣

1. はじめに
2. 初代斎藤兵太郎
3. 斎藤牧場事務所
4. 事務所の外観
 - 1) 屋根
 - 2) 窓
 - 3) ベランダ
 - 4) 外壁
5. 事務所の内部
 - 1) 間取り
 - 2) 造作
 - 3) 住居部分
6. まとめ

1. はじめに

昭和も60年を越え、明治・大正は遠い昔になってしまった。明治といえば思い出す赤レンガの建物も、全国で1,000棟も残っていない。

消えゆく明治・大正・昭和戦前の近代建築（古くは洋風建築と呼ばれたもの）がどれだけ残っているか、日本建築学会が調査に着手したのが1974年であった。全国くまなく調べるのに5年間かかった。

1980年、『日本近代建築総覧』が建築学会より刊行された。これは現存する戦前までの近代建築の台帳である。約1万3,000棟の近代建築が記録されている。

上記の約1万3,000棟はどんな種類の建築なのであろうか。35項目に分けて分類してみた。一番多いのは小・中・高校の校舎である。ついで住宅、商店と続き、一番少ないので気象台・測候所である。しかし、この35項目に農業・牧畜に関する分

目 次

斎藤牧場の事務所建築	山 口 廣	2
擦文豎穴における集石	宮 宏 明	11
浦幌町の古地名に関するメモ	後 藤 秀 彦	19

写真説明：浦幌開拓獅子舞 明治35年に富山・石川両県から本町「土田農場」に入植した人々は越中獅子舞を本町にもたらした。昭和39年には保存会も結成され、後継者の育成も順調にすすみ、いくつもの大舞台を踏むようになった。浦幌町無形民俗文化財第1号。（後藤秀彦）

前藩主に小姓として仕え、長じては佑筆役を勤めたという。佑筆とは貴人に仕える文書係、つまり秘書役である。小姓から佑筆へと永く藩主のそば近くに仕えたということは、彼にそれだけの文筆の才能、気くばりの巧みさがあったからであろう。

明治維新があり、廃藩置県となったのは1871年（明治4年）、斎藤兵太郎が15歳の折である。彼が函館の田畠商店に入った年は分らない。その後、同地の広業商会函館支店に移り、1880年（明治13年）には24歳で同商会広尾出張所主任となっている。武士として古風な思想に染まるのにはまだ幼くして新時代を迎える、かつ事務的能力に恵まれていたので、早く転身し順調に才能を伸ばしたのであろう。

斎藤兵太郎は没するまでさまざまな事業を興こし、かつ仕事仲間の間ではしばしば重要な役職についている。彼の仕事の中に、初代大津郵便局長、十勝漁業組合初代頭取、十勝産牛馬組合副組長、十勝無尽株式会社設立発起人・取締役、帶広町煙草元壳捌人などの役職名が見える。たとえば、郵

便局が各地に設けられた折、その局長は地元の資産と信望ある者が選ばれたのは良く知られている。彼が大津へ移ったのは1886年（明治19年）であり、その年に郵便局長になったとすれば、30歳である。青年であり、地元との縁もまだない。とすれば、官界とくに開拓使に何らかの有力なつながりをすでに持っていたのではないか。確証はまだ何もないが、斎藤牧場の開設の折に北海道長官が来場したという話（斎藤兵一郎氏談）が、推測の一端を裏付けてくれる。

3. 斎藤牧場事務所

『浦幌町史』の巻末「浦幌町の足跡」に、「明治20年（1887）5月、浦幌に十勝産馬改良組合を組織す（石黒林太郎、大内平八郎、阿部徳松、斎藤兵太郎）」

とある。牧畜に関し斎藤兵太郎の名前の見れる最初である。

産馬は軍馬の需要を背景として道内にひろがつていった。浦幌町は海に近く気候は内陸ほど厳しくない。特に厚内は海に接している。『浦幌町史』



PL. 1 斎藤牧場(明治43年ごろ)(河西支庁編『十勝国産業写真帖』より)

には、

「当時の牛馬の放牧場は、柵なしであり、日中は海岸に出て虻あぶを避け、夜は山に入って草を喰い、そのためか肥ったものだということである。」

と記している。産馬は有望な仕事であった。

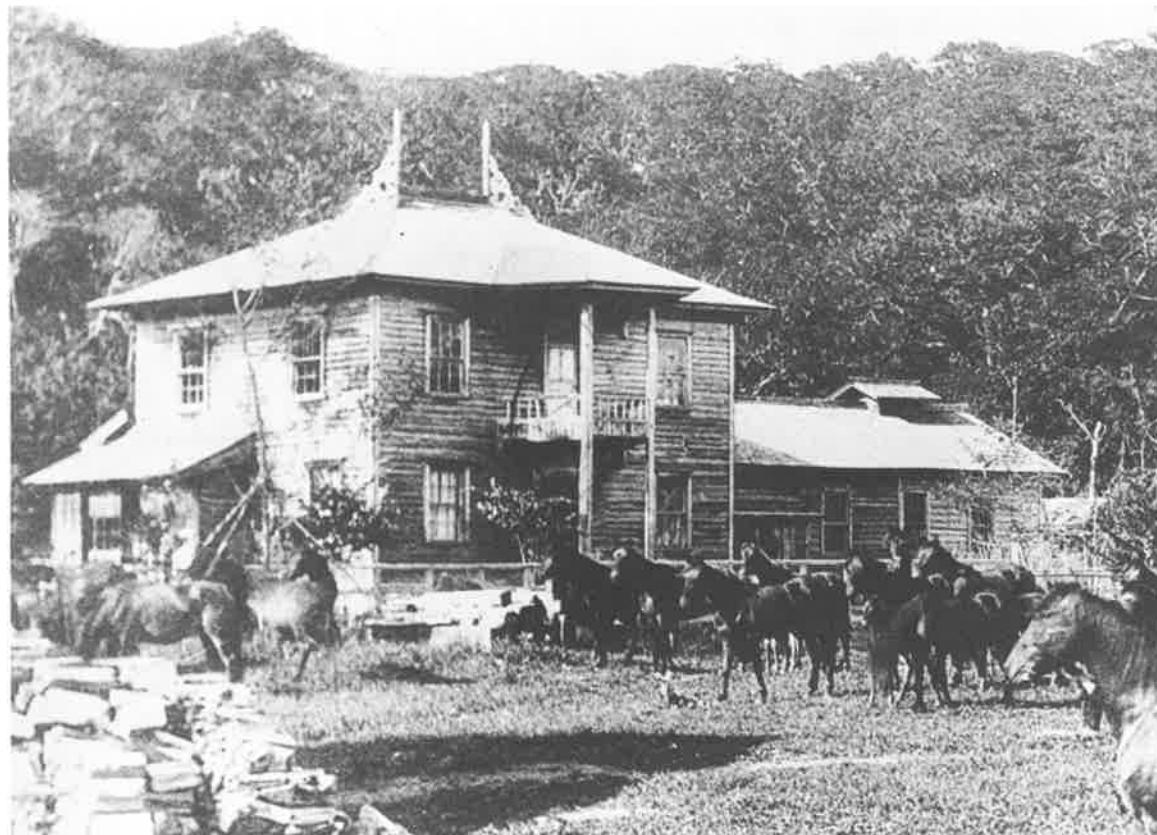
ふたたび「浦幌町の足跡」をひもとくと、

「明治36年（1903）12月25日、釧路線音別より浦幌間の鉄道開通（浦幌駅、厚内駅開く）、運送事業開始。」

とある。同年、斎藤牧場も開場した。両者の間に関係があろうと思われるが、詳しくは知らない。

ともあれ、この年に最初の建築群が建てられた。当時を知り得る最も古い写真に、1910年（明治43年）ごろ撮影の一枚がある。4棟の建物が写っているが、すべてが開場当初のものかは確認できない。

しかし、事務所・住居棟は規模も大きく、かつ開場と共に斎藤兵太郎はこの地に移り住んだと言われることにより、この建物は1903年（明治36年）竣工と考えて誤りなかろう。



PL. 2 斎藤牧場の事務所と住居(明治43年ごろ)(河西支庁編『十勝国産業写真帖』より)

なお、牧場入口近くにある牧舎もきわめて古い。開場当初かそれに近い頃の竣工と考える。折を得て調査確認が望まれる。

4. 事務所の外観

事務所建築の外観を、そのデザインと構造に留意して見てゆきたい。

1) 屋根

日本建築と西欧建築の違いは、まず屋根にすぐ見て取れる。

日本建築では、屋根にきわめて大きな注意を払う。屋根こう配やかすかな「むくり」や軒先の「そり」は、日本独特のものである。千鳥破風や唐破風でにぎやかに飾った天守閣の屋根、屋根を重ねてリズムを与える五重塔や三重塔など、日本建築の美は屋根のデザインに負うところが大きいといって過言でない。西欧建築で屋根は重視されない。どきには軒飾りの陰にかくれ見えない場合すらある。西欧建築で屋根をひき立たせるときは、屋根窓か塔で飾るのが多い。

斎藤牧場の事務所の屋根は、寄棟造りで装飾は



PL. 3 小樽米穀飼肥料取引所(明治27年)(北海道建築士会編『北海道の古建築と街並み』より)

今は無い。しかし、上述の古写真には棟飾りが写っている。短い棟の両端にきわめて特異な飾りを載せている。北海道に現存する他の建築で同じ棟飾りのあるのを知らない。しかし、たとえば北海道建築士会編『北海道の古建築と街並み』をひもとくと、

北海道集治監十勝分監(明治27年 帯広市)

移民休憩所(明治30年 小樽市)

私立小樽商業学校(明治40年 小樽市)

武華駅通(大正9年 留辺蘿町)

小樽米穀飼肥料取引所(明治27年 小樽市)

など、明治20年代以降、各地の建築に用いられたのが分る。この棟飾りのさらに本格的なのは、

函館区公会堂(明治43年 函館市 設計小西朝次郎 施工村木甚三郎)

であろう。すなわち、棟の両端に飾りを立てるだけでなく、棟の全部の上に手摺り状の飾りを載せている。これは、西欧建築ではルネサンス様式の特色の一つとされている。棟飾りの多くは鋳鉄で造られている。

このルネサンス様式は、明治初期の県庁から町役場、大学から小学校まで、官庁・学校など公共建築に好んで用いられている。これが、日本建築の屋根を飾る鶴尾や鬼瓦に代るものとして一般の建築にも受け入れられていったのである。

2) 窓

外壁ですぐ目につく和風と洋風の違いは窓であ



PL. 4 函館区公会堂(明治43年 設計小西朝次郎)
(北海道建築士会編『北海道の古建築と街並み』より)

る。今でも日本では「引き違い窓」が多いが、歐米では「開き窓」や「上げ下げ窓」が多く、「引き違い窓」はほとんどない。

明治の洋風建築は、気をつけて見ればすぐ分るがほとんど「上げ下げ窓」である。この点、斎藤牧場の事務所も同じである。

さらに興味をひくのは、古い写真に見られる窓桟の割付けである(現在の窓では変ってしまっている)。1枚の窓にガラスを横並び3枚を2段に6枚入れてある。実測図に窓寸法の記入はないが、3尺の柱間にちょうど納っていると考えられる。すると、かつての6枚入りのガラスの大きさは「半紙判」と呼ばれる寸法が 35.56×25.4 センチメートル(14×10インチ)の最小の規格品であったと判断される。北海道工業大学遠藤明久教授が『札幌の建物』(さっぽろ文庫23)で書いておられるところによれば、この「半紙判」の小サイズの板ガラスの使用と、「6枚入りの建具」という呼称は北海道独特のもので、

「札幌を中心に全道的に、住宅はいうまでもなく、一般の木造建築、特に役所建築の設計に採用される」

とある。この事務所の窓は、札幌から道東へ伝えられた特色の早い例証として貴重である。

なお、遠藤明久教授は、「上げ下げ窓」についても、

「この明治後半から大正にかけた年代の上げ下げ窓の存在は、開拓使洋風建築の影響である」と述べている。道内の近代建築をことごとく知つておられる研究者の言葉ゆえ引用しておく。



PL. 5 吉田眼科病院(明治末期 札幌市)(北海道建築士会編『北海道の古建築と街並み』より)

3) ベランダ

明治初期の洋風建築にはベランダの付いた建物が多い。たとえば、良く知られるつぎの建物にもある。

泉布観(明治3年 大阪市 設計 T. J. ウォートルス)

開智学校(明治9年 松本市 設計立石清重)
明治の初めから、ベランダの付いた建物はいくらでも実例を挙げられる。北海道でも実例が多い。



PL. 6 泉布観(明治3年 大阪市 設計 T. J. ウォートルス) 筆者撮影



PL. 7 遺愛女学校(明治15年 函館市)(北海道建築士会編『北海道の古建築と街並み』より)

豊平館(明治12年 札幌市 設計開拓使工業局 営繕課)

遺愛女子学校(明治15年 函館市)

ベランダは明らかに西欧建築から学んだデザイン・モチーフであった。しかし、西欧建築ではそれほど見られるものではない。それなのに、日本の早い時期に建てられた洋風建築にしばしば現れるのは、西欧建築がインドや東南アジアの各地を経て日本に伝えられるとき、南方でつけ加えられたベランダを西欧建築に不可欠のモチーフと思いつこんでしまったからだと解釈されている。

斎藤牧場事務所のベランダは背が高い。普通ならベランダの床と軒は、母屋より一段低くなるのだがここでは同じ高さである。平面形も長方形ではなく台形である。したがって、実用より建物が洋風であるのを強調するのに付けられたと考えてよい。

なお、明治43年ごろの写真と現状を比較すると若干違っている。

一つは、2階ベランダの上に色ガラスをはめた欄間が設けられたことである。ベランダの軒が母屋の軒と同じ高さのため、ベランダに雨や雪が吹きこむのを防ぐのに後から設けたのであろう。

もう一つは、古くはベランダ両端の通し柱がそのまま見えていた。現在ではベランダの床まわりに蛇腹をまわし、さらにその下に柱頭と持送りを付けてある。1階車寄せ部分にもっと格式を与えるために後から加えたのであろう。

4) 外壁

外壁を下見板張りにするのは和風木造建築でも見られる。洋風の下見板張りを和風と見分けるのに、いくつかのポイントがある。一番分かりやすい



PL. 8 斎藤牧場事務所のベランダ(『浦幌町郷土博物館報告』25より)

のは、洋風ではよくペンキ塗りをしてあることがある。和風では柿渋など塗ることはあっても、ペンキ塗りはない。もう一つは板幅を注意して見ることである。しかし、一般にはここまできちんと洋風に仕上げた建物は少ない。

斎藤牧場事務所の外壁も、特に洋風か和風かを見分けるポイントはない。ただ一つ、古い写真と現状を比較すると、正面(南面)外壁の1・2階の間に蛇腹(コニクス)が後から付け加えられている。明かに、外観をより洋館らしくするため加えたと考えてよい。

5. 事務所の内部

事務所の内部に入り、平面計画と内装を見てゆきたい。

1) 間取り

日本は古代から木造建築を建て続けてきた。それも校倉造りのような構法による建物はきわめてまれで、ほとんどが柱・梁構造である。この場合、建物の骨組みはまず柱と梁で組まれ、壁は後からはめこまれる。その壁は屋根や床の重さや地震や風の力に耐える役割を分担していない。したがつ

て、必要なければ壁を設けなかったり、あるいは必要に応じて壁に穴をあけたりする。典型的な農家の田の字型の間取りも、このように見ると、日本独特の柱・梁構造であるがゆえに生まれたプランであるのが分る。

西欧建築は石や煉瓦で造られている。家を建てるには、まず石や煉瓦を積んで壁を造ることからはじめる。壁が先に造られるから、必要な所に窓や出入口をあける。部屋は1つ1つ重い壁で仕切られているから独立性は高いが、出入口だけつながっている。日本の家のように襖・障子で気軽に部屋から部屋へ通り抜けたり、襖・障子を取りはらって部屋と部屋をつないでしまったりできない。それゆえ西欧建築では、廊下やホール(広間)が部屋へ行くのに大変重要な役割を持ってくる。もし、2階建であれば、これに階段が加わる。

ながながと説明したが、西欧建築では玄関を入れると広いホールがありそこに立派な階段があるのは、そもそも壁を積んで造る(組積造という)永い習慣から来ているのである。

斎藤牧場の事務所も正面中央にポーチと玄関がある。中へ入れば、きっとホールと階段があると思えるがそうでない。階段は玄関から廊下を右へ行った先にある。

玄関の左右に洋室があるところまでは、西欧建築を手本にしている。しかし、その奥は和風の伝統に従っている。日本の伝統的な和風住宅で一番大切な部屋は「座敷」という。座敷には「床の間」「違い棚」、「付書院」を設ける。これをまとめた「座敷飾り」という。この床・棚・書院のどれかを省略する場合もあるが、3つそろっているのが正式の座敷飾りとされる。もう一つ、座敷には「次の間」が続けて設けられるのが正式である。

斎藤牧場の事務所には、1・2階とも正式の座敷が設けられている。どんな客でももてなせる立派な接客空間である。もし、これを洋風でととのえるとしたら、暖炉を設けたりシャンデリアを吊したり、内装だけでも大変である。それに椅子、テーブルをそろえるとなると、和風にくらべどれだけ多くの費用がかかることか。それに、明治36年という時代のこの地方での人びとの日常生活を考えると、洋風に造れば自慢にはなるだろうが、何んの役にも立たなかつたろう。

和風座敷を設けたため、階段は隅に押しやられ

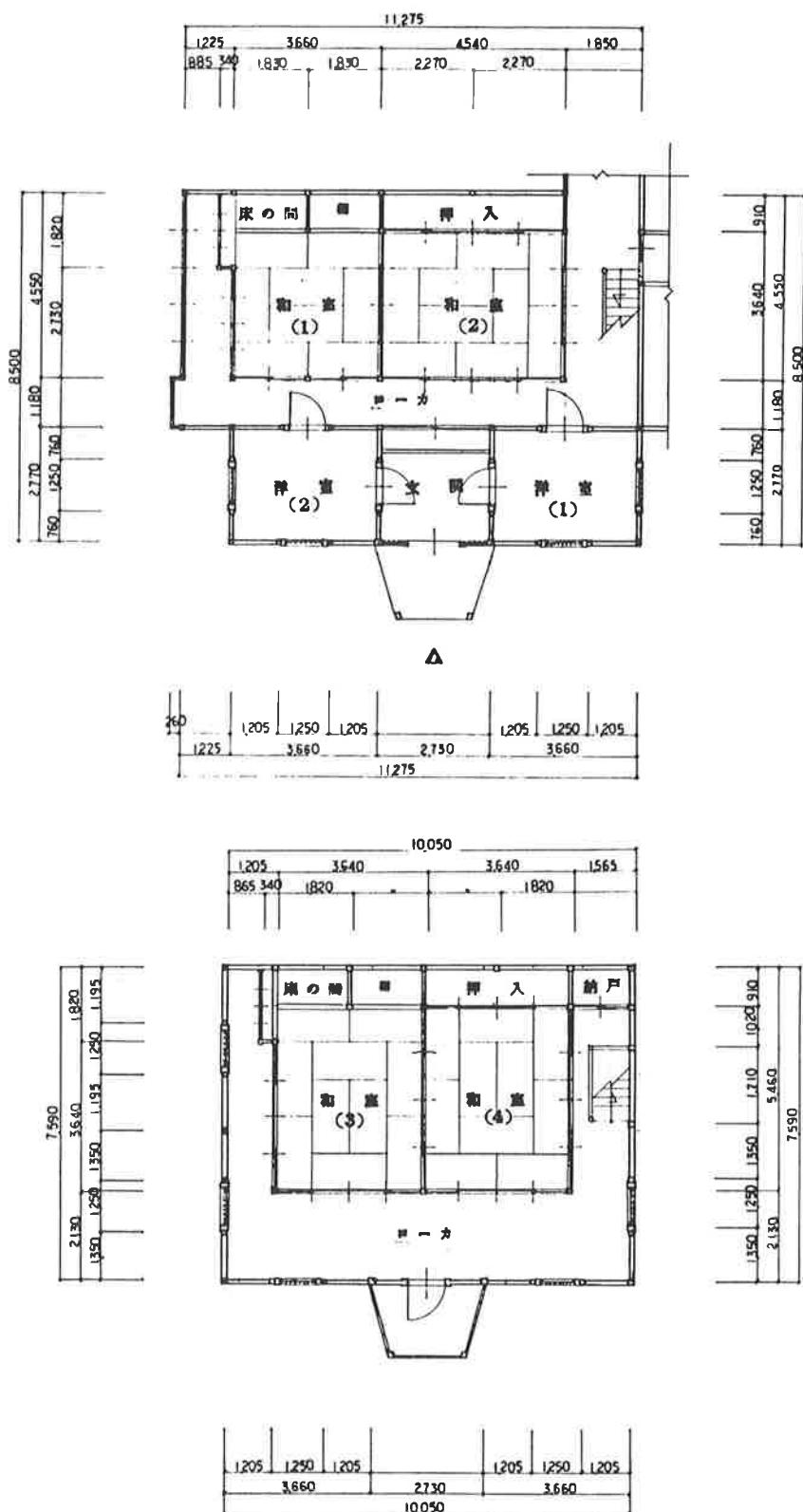


Fig. 1 斎藤牧場事務所 1階平面図(上)、2階平面図(下)(北海道建築士会十勝支部東十勝分会実測作図)



PL. 9 事務所2階座敷(『浦幌町郷土博物館報告』25より)

てしまった。しかし、少なくとも正面は洋風らしく、玄関左右に洋室を設けた。そのため、1・2階の平面図をよく見くらべると、座敷の位置、廊下の幅などがかなり違っている。その結果、1階の西側と北側にはみ出した部分(下屋)ができてしまった。もし、この下屋部分がないと、1階座敷の床・棚・書院が付けられないからである。つまり、

外観は洋風にするよう努めたが、内部では特に1階の座敷が大切だったからである。

2) 造作

事務所内部の造作がどれほど竣工当時と変わらないか分らない。特に2つの洋室には関心があるが、調査できなかった。

2階ベランダへの出入口上の欄間に赤と緑の色ガラスがはめてある。明治洋風建築によく見られる特色の1つで、おそらく竣工時からのものであろう。

和室でまず気付くのは、壁が土壁でなく壁紙による張り壁という特色である。ただし、当初からか後補なのかは、壁紙をめくって調べてみないと断言できない。

「座敷飾り」は1・2階とも床・棚・書院が揃っている。「床の間」は、1階の落掛に丸太の面取りが用いられているが、他は定式通りである。

「違い棚」は1階は一番正式な違い棚、2階は棚板3枚の西棊棚で、1・2階とも棚上に袋棚(天袋ともいう)がある。「付書院」は窓だけの平書

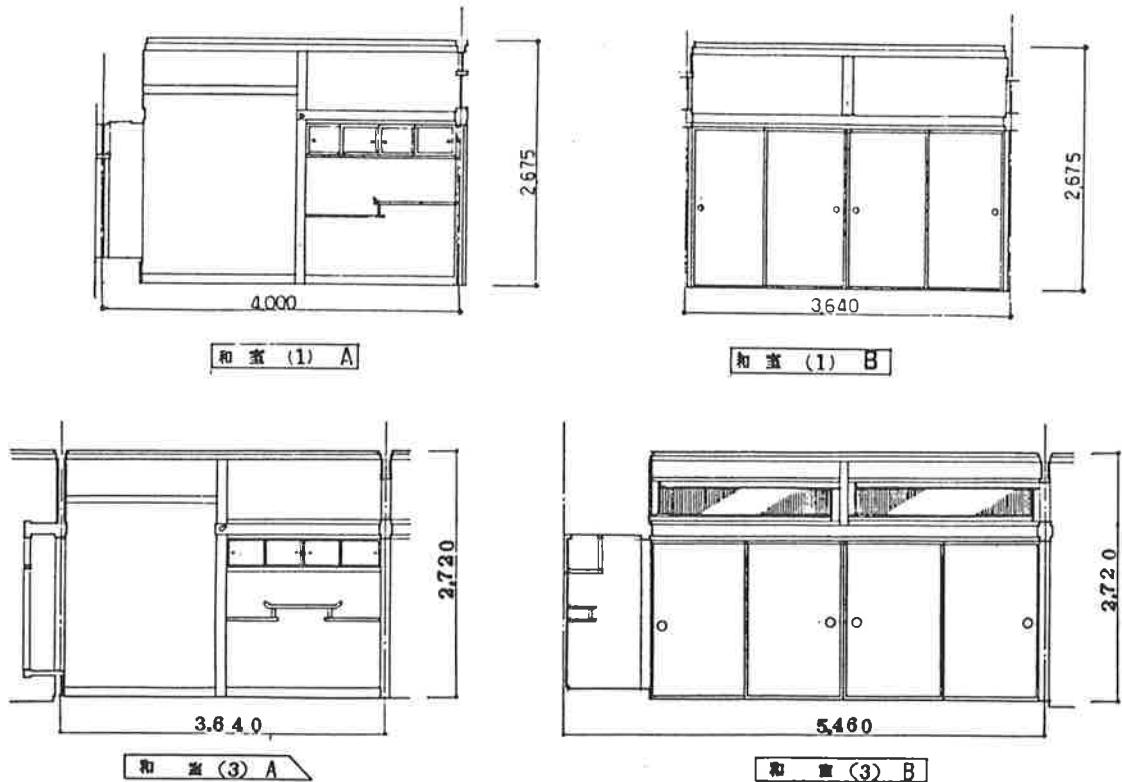


Fig. 2 事務所1階座敷(上)・2階座敷(下)展開図(北海道建築士会十勝支部東十勝分会実測作図)

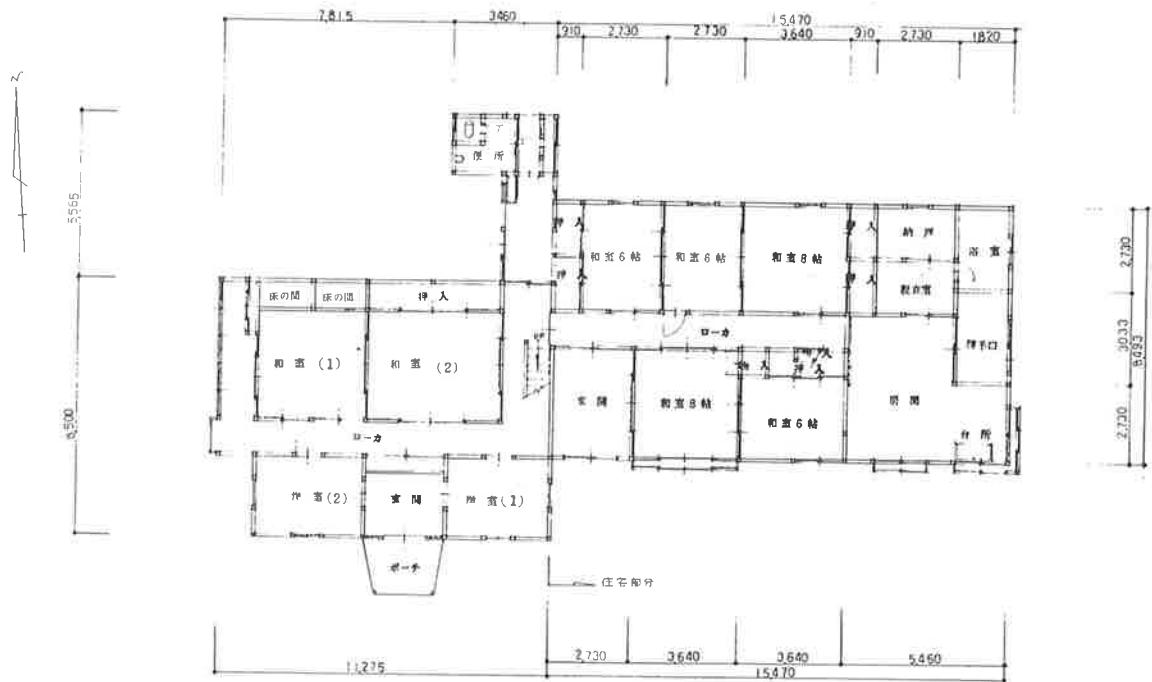


Fig. 3 事務所・住居全体平面図(北海道建築士会十勝支部東十勝分会実測作図)

院でなく、地板を敷いた奥行のある正式の付書院である。すなわち、「座敷飾り」は略さず崩さず格式をきちんとふまえたものといえる。

ついでにふれていえば、座敷と次の間の境いの襖の上に欄間があるが、模様を切り抜いた板欄間とせず、正式な築欄間としている。

3) 住居部分

事務所の東側に、平屋の住居部分が接してある。明治43年ごろ撮影の写真にもあるので、事務所と共に建てられたのであろう。実測図でも小屋組が接続している。ただし、住居部分の屋根と事務所外壁との接合は、かなり粗雑で若干疑問が残る。外壁を後に補修したためであろうか。

住居部分の間取りは中廊下型である。ただし、両側に部屋が並んでおり、大正期に見られる近代化した都市住宅の中廊下型の間取りとは異なる。北海道にある同時代の他の住宅を見ていないので、推測も判断もできないが興味をひかれる。

6.まとめ

斎藤牧場の事務所建築について、主にそのデザインに注目しつつ考察してみた。知り得たことを再度要約すればつきのようになる。

①外観は洋風建築らしくと心掛けて造られている。

その中に、広く明治洋風建築の一般的特色を示す部分と、北海道の洋風建築のみが持つ特色を見ることができる。

②内部は、一部洋風とするが、和風座敷を主体に構成されている。

十勝は明治時代以前は未開の地であった。アイヌ人が生活していたであろうが、生活の面で開拓に入った人びとのつながりは薄い。まして、歴史や文化の面では受け継ぎ話り伝えられるものはほとんどない。すでに築かれた豊かな歴史と文化の中で育った我われには、ただ未開の地で暮らすというだけでなく、歴史も文化も無い地で暮らす苦労は想像をこえている。集団移住の場合、たとえば釧路に鳥取傘踊りが今に伝えられるのは、生活と共に文化も移し心の糧としたからである。

松前、すなわち北海道生まれで、単身この地に移ってきた斎藤兵太郎の場合はどうか。移せるのは彼個人の歴史と教養しかなかった。あとは、自らの手で歴史と文化を創造してゆくしかない。

牧場経営は新しい仕事である。はじめに、札幌農学校に模範家畜房が建てられたのは良く知られている。南部（岩手県）での産馬は昔から知られているが、北海道ではアメリカ大草原での牧畜が

原風景になっている。それを忠実に写したのが、斎藤牧場の事務所であり牧舎である。ただし、事務所の内部は、武士の子であった斎藤兵太郎の面影が写されている。恐らく、彼にとってこれが自らの手で歴史と文化をつくってゆくのにふさわしい姿に思えたからであろう。

附言

筆者は北海道生まれでなく、北海道に住んだこともない。ただ、日本近代建築の研究者として、乞われるままに興味を持ち訪ねた斎藤牧場の事務所建築につき考察を試みた。不充分で誤りもあることは筆者が最も良く承知している。読者の批判を期待している。

図面については、北海道建築士会十勝支部東十勝分会で作製した実測図を用いた。古い写真については、浦幌町教育委員会後藤秀彦氏が送って下さったおかげで拝見できた。これらの資料がなかったら、とても筆をとる決心はつかなかつたろう。

深く感謝している。

(日本大学生産工学部建築工学科教授)

引用文献

- 浦幌町史編さん委員会編（1971）『浦幌町史』
浦幌町
- 日本建築学会編（1980）『日本近代建築総覧・各地に遺る明治大正昭和の建物』技報堂出版
- 日本建築学会北海道支部（1975）『北海道の建築 1863-1974』丸善
- 北海道建築士会編（1979）『北海道の古建築物と街並み』北海道建築士会
- 後藤秀彦・安藤忠司・三浦道春（1985）「厚内・斎藤兵一郎邸の調査について」（『浦幌町郷土博物館報告』第25号）浦幌町郷土博物館
- 札幌市教育委員会編（1983）『札幌の建物』（さっぽろ文庫23）北海道新聞社

擦文豊穴における集石

宮 宏 明

はじめに

擦文文化の豊穴住居址の床面や豊穴住居址の周辺から時折、長円形の自然礫の集中がみとめられる。長さ7・8cm、幅5・6cm、厚さが2・3cm程の河原石である。

これらの礫の用途がどのようなものであったのか、出土位置や出土状況等から考えてみたい。

拙稿をまとめるにあたって御配慮いただいた後藤秀彦氏並びに御指導いただいた岡田淳子・藤村久和両先生に対して心より感謝申し上げる次第です。

主要遺跡の概要

擦文文化の豊穴住居址を伴う遺跡の発掘調査例は、今日50遺跡余を数えるが、そのうち本稿では主要な20遺跡の事例について比較検討を加える。以下、遺跡ごとに集石と竈の位置関係に限定し、その概要について述べることにする。

浦幌町十勝太古川遺跡（明石他 1973）

Fig.1のように第1地点（1号～7号豊穴）における集石の出土状況には興味深いものがある。1号豊穴（Fig.2）から東へ3m程のところには20個の礫によって構成されている集石aが検出された。すぐ近くには紡錘車（註1）も出土している。野外におけるこの種の作業空間として位置づけられよう。同様に5号豊穴南側の集石d、7号豊穴東側の集石f、11号豊穴北側の集石g等があげられよう。豊穴内においては南壁際から検出される傾向がある。これは竈が東側にあるということと密接な関係がありそうである。Fig.1のように本遺跡の豊穴に伴う竈はいずれも東側に向いて構築されている。

浦幌町十勝太若月遺跡（後藤他 1974）

第3号住居跡及び第4号住居跡にはそれぞれ1カ所づつの集石がみられる。3号は豊穴東側より、4号は北側より検出された。いずれも10個程度の